

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本整形外科学会雑誌 (2006.04) 80巻4号:S409.

プレコートステムの中期成績

伊藤浩, 平山光久, 谷野弘昌, 大水信幸, 松野丈夫, 三浪
明男

3-E-17

プレコートステムの中期成績

伊藤 浩¹ 平山 光久¹ 谷野 弘昌¹ 大木 信幸¹
松野 丈夫¹ 三浪 明男²

【目的】セメント使用ステムの表面には滑らかなもの、粗いもの、PMMA コーティングしたものなどがあるが、最適な表面加工に関してはまだ結論が出ていない。プレコートステムの中期成績を検討したので報告する。

【方法】1987年3月から1996年10月まで、145例163関節に対してハイブリッド型THAを行った。対象は、術後7年未満で死亡した例や追跡不能例を除く111例128関節である。手術時年齢は平均61歳(16-84歳)。経過観察期間は平均11.0年(7.0-16.5年)。ステムはHarris Precoat, Precoat Plus, CDH Precoat stem (Zimmer社)のいずれかを用い、いわゆる第2世代のセメンティングテクニックを用いた。ソケットはHGP-1か-2を用いた。

【結果】再置換術は6関節(5%)に施行されていた。再置換の理由は、術後感染が1関節、ソケットの弛みが1関節、反復性脱臼のためソケットの交換が2関節、ソケットメタルシェルからのポリエチレンライナーの脱臼が2関節であった。ステムで機械的な弛みを生じたものはなかった。日整会スコアは術前平均46点が、術後平均86点に改善していた。ステム側で骨-セメント間のradiolucent lineは26関節(20%)に認められた。ステム周囲のosteolysisは4関節(3%)に発生していた。1関節(1%)に一時的な坐骨神経麻痺を認めたが、その他術後深部感染や肺塞栓などの重症な合併症は認められなかった。

【考察】プレコートステムではステム-セメント間の結合力が増加することが報告されており、その良好な臨床成績が報告されてきた。しかし近年、表面が滑らかなステムと比べ、その成績は劣っていると報告が多い。THAの弛みには、ステム表面加工の他、ステムの形状、オフセット、手術手技、患者側のfactorなど多くの要因が関連するが、今回の検討ではプレコートステムの中期成績は良好であった。

¹旭川医大整形 ²北大大学院整形